

# 大学が少子化問題を解決する

森開 こゆき

(コミュニティ政策学科 2014 年卒業)

## 序章

大学が、現代日本の抱える少子化問題に貢献できるのではないか。自らが大学生でありながら出産・子育てをするなかで、大学という教育機関には少子化問題に果たせる役割と責任があるのではないかと思いついたことから、本論文では、出産・子育てがしやすい社会の実現のために大学が貢献できることを考えてみたいと思う。そのなかでも特に、立教大学の子育て支援について見直してみたい。というのも、私自身が大学3年次に妊娠と出産を経験し大学に通い続けるなかで、大学の子育て支援に疑問を抱くことがあったからである。私の通っていた新座キャンパスには託児所がなく、私と夫（彼も学生だった）は授業の時間をずらしながら交代制で育児と勉学を両立していた。受講したい授業があっても我慢し、二人とも予定がある日は義母に来てもらったりし、ことあるごとに大学に託児所があればいいのに、と感じていた。しかし私たちが学校に通い続けられたのは、出産の時期や周りの協力などにおいてたまたま幸運だったからであろう。大学が学生に具体的な対策を講じ、実質的なサポートができていれば、私たち自身は言うまでもなく、本校の学生たちの現実はずっと違ったものになっているのではないかと想像する。大学生が子どもを産み育てることに関しての是非は別途検討の必要はあるが、そのような現実が存在する以上、大学はサポートをする必要があるのではないか。立教大学が女性の自己実現に寄与できる大学として、さらには少子化が深刻な課題となっている社会全体に貢献できる大学であるためには、どのような対策を取っていくべきなのか。

本論文では、立教大学の現状を見直し、自身の経験と立教大学新座キャンパスの託児所設置に向けた取り組みを中心に、育児サポートにおいて立教大学のあるべき姿を検討していきたい。

## 第1章 育児は大変！周囲の協力が絶対に必要！

### —自身の経験から—

育児は大変である。そのことは誰もが頭では理解しているだろうが、当事者でないとわからない過酷さがある。というのも、小さな子どもを連れた家族は幸せそうに見えるものだからだ。私自身も子どもが生まれてからは、想像していた「赤ちゃんとのハッピーライフ」と遠くかけ離れたものであることに愕然としてしまった。出産は女性の人生と女性自身そのものと、またその関係性を一変させてしまうほどの大きなインパクトを持っている。そしてそのインパクトは良い変化をもたらすことも、苦痛な結果を招く危険性もはらんでいる。この章において、自身の経験から出産による変化と周囲の協力の必要性を述べたい。

私は出産をして「尽くすひと」になった。赤ちゃんの「奴隷」になったとも言える。自分中心で回っていた世界が子ども中心の世界になり、道理も何もない赤ちゃんの「奴隷」となり、身を尽くす生活を余儀なくされている。生後3ヶ月くらいまでは、昼夜関係ない赤ちゃんの生活リズムに合わせ、夜は十分に寝ることができないし、ゆっくりお風呂に入ることもできない。生活リズムが付く4ヶ月以降になっても、今度はハイハイで動き出すので、目が離せない。離乳食も始まり、その準備や食事の補助に苦勞する。1歳ごろになると自分で食事をする意志が芽生え親の食事の補助を拒むのだが、周囲は食べ物で散らかり悲惨なことになる。さらにトイレすらゆっくりすることができない。子どもは後追いをするようになってからどこまでも親についていこうとし、トイレにまでついてくるのである。2歳になるとイヤイヤ期が始まり、何をしてもイヤイヤなので、子どもに手を尽くす努力さえしたくなくなってくる…。睡眠や食事や排せつ、入浴など人間の生理的欲求を含めたあらゆる行動を自分のペースで行うことができないというのは、本当に辛いことである。

しかしこのような生活の中、私は学校に行くことによって学生気分を味わいリフレッシュしていた。よく「学生と子育ての両立、大変でしょう」といったことを言われていたが、子どもとずっと二人きりでいる現在の専業主婦の方のほうが、子どもから解放されず過酷である。実際に、仕事と育児を両立する女性よりも、専業主婦で育児をする女性のほうが鬱になりやすい傾向がある。「3歳児神話」などに見られるように、世間一般的には子どもは母親のそばにいたほうが良いとする意見が多くある。しかし一方で、母親にとっては子どもと少し離れる時間が絶対に必要である。悶々と一人で育児をすることでストレスがたまり虐待につながるというのは大いに考えられることである。子どもを出産する前まで、ニュースで見るような悲惨な虐待事件を起こす親というのは、育ってきた環境が相当悪かったり、倫理観が歪んだりしているのだと思っていた。しかしそれは違う、と

子育てを経験し考えを改めた。子育ては苛酷なものであり、誰にでも虐待を起す危険性はある。母親を一人孤立させない、たまに育児から解放させる、そのためには周りの理解と協力が必須である。私自身も、子どもがいながら学校に通えたのは、夫や義母の協力があってからである。子育ての苦労は傍からは見えづらい。だからこそ、「みんなで子どもを育てる」という気持ちと実質的なサポートが社会全体に浸透していれば、母親にとっては大変心強い。教育機関である大学が子育てに協力しないというのは、どうだろうか。これからの時代は多種多様な人が大学に通うことになるであろう。大学における子育て支援の需要も増えるはずである。次の章では、大学における子育て支援の必要性について考察する。

## 第2章 大学が出産・子育てに果たせる役割

大学は社会にとって大切な社会資本である。この大学が、社会の枠組みの中で少子化に貢献できるあり方をこの章では考えていきたい。大学が日本社会における出産・子育てに貢献できることは大きく3つあると考える。

1つ目に、出産や子育てを積極的に受け入れることのできる若者を増やすために、大学が若者に働きかけることができるのではないかという点である。少子化の原因のひとつである晩産化を克服するためには20代の出生率を上向かせる必要がある、多くの人々がちょうど20歳を迎えるのが大学時代である。大学での環境や学びが今後の人生を描くうえで大きな影響を与えることは言うまでもない。すなわち、大学の子育て支援のあり方が20代初期の若者の出産や子育てのイメージや見通しを形成するのに大いに関係することとなる。

2つ目に、社会に入る手前の大学で、男女共同参画についての意識や価値観を見直すことで、日本社会に男女共同参画の精神を根付かせることができるのではないかという点である。政府が男女共同参画推進の取り組みをしているのにも関わらず、日本社会の男女共同参画は国際的に見て進んでいない。このことが示唆するのは、男女共同参画実現において必要なのは枠組みではなく、企業や国民の意識や価値観の変革であるということであろう。

3つ目に、妊娠・出産・育児に関して、大学においても何らかの支援を求めている若者が多くいるのだという現実を直視しなければならないという点である。20代女性における妊娠中絶の実情は各年齢において、最も深刻である。厚生労働省による「平成24年度 衛生行政報告例」によると、平成24年度の中絶件数は196,639件で、そのうち20代の中絶が84,169件と最も多い。約6割の学生が大学に進学することを考えれば、大学生においても中絶の現実はあることがわかる。大学が中絶問題に果たせる役割は大きいはずである。実際に大学2年生のころに中絶を経験した立教大学コミュニティ福祉学部のAさんにお話を伺った

(2013年11月24日、12月6日、大学内食堂『こかげ』にて)。

妊娠が発覚したときの大学側のサポートとしては、

コミ福は先生と生徒の距離が近いこともあって、先生にはすぐに相談できた。コミ福じゃなかったら、例えば経済学部の先生とかだったらわかってくれなそうだけど、コミ福だったからわかってくれると思って相談できた。結果は産むことが出来なかったんだけど、それでも悩んでる時に相談できたことが、今の自分を支えてる。もし誰にも打ち明けられなかったら、ひとりで抱え込むことになると思うから。

と話してくれた。立教大学コミュニティ福祉学部の福祉マインドの姿勢が当時の彼女を支えていたことがわかる。しかし同時に、福祉マインドを掲げているにも関わらず出産後の育児サポートの体制が整っていないために、彼女の出産を後押しする力にはなれなかった。彼女が当時大学に求めていたものを伺った。

妊娠したことに対して自分の“無責任さ”を感じてたから、大学側に支援を強く要求することは出来なかった。本当に産みたいと思ってたから、家族を説得させるためにもまずは大学の制度を調べようとして学生相談室に行ったんだけど、カウンセラーの人たちは大学の制度を詳しく知ってるわけじゃないから、学生課とか教務課に行って情報を集めた。でもやっぱり、悩んでる時って行動するのも大変だから、学生相談室ですぐに知れたらよかった。あとは、もし学内に保育所があったら、少し違ってたんだと思う。学内に保育所があるっていうことは、“子育てに前向きな空気がある”ってことだから、産もうと思えるひとつのプラスの要因になってたと思う。あとは例えば奨学金とか、経済的な面をサポートするものがあつたらよかったかもしれない。

学生相談室は、悩みを持った学生がまず初めに訪れる場所である。学生相談室は主に精神的なサポートに力を入れているのであるが、それ以前の実質的なサポートを求める学生のことも想定し、すぐに情報提供ができるように講じることが重要ではないだろうか。また、学内保育所はただ預かる場としてのみでなく、“子育てに前向きな空気”も作り出すという。そのような空気が、出産を決意するひとつの大きな要因となり得る。

また彼女と同様に、私自身も妊娠したことに対して自分の“無責任さ”を強く感じていた。学生中に妊娠することに対して自分の“無責任さ”を感じる背景に、日本の文化的思想や価値観があると考えられる。例えばアメリカやオーストラリアでは学生ママが決して珍しいものではなく、学生がベビーカーを引いて歩く姿なども見られるという。そのような国においては、学生で妊娠・出産することは大きな悲劇などではなく、また自分を強く責めるようなことでもないのではないかと想像する。そのような点から、大学が子育て支援にどのくらい本気で取り組んでいるかによって、学生の出産・子育てに対するイメージが大きく変わってくるの

ではないだろうか。

以上3つの理由において、大学が日本の少子化に果たせる役割は大きいと考える。次章では立教大学の子育て支援の現状をみていきたい。

### 第3章 立教大学の子育て支援

立教大学には、池袋キャンパスに「エンゼルルーム」という託児所が存在する。開設対象日は土曜日と祝日授業日である。利用資格は、保育対象の子どもを持つ本学学生（科目等履修生は除く）および勤務員（立教学院本部勤務員、兼任講師・派遣職員・アルバイトなど専任勤務員以外の勤務員を含む）で、授業、勤務、大学行事参加のために保育を行えない人である。エンゼルルームの利用案内規約2012年度版には「立教大学では、現代社会の中で子どもを育てながら、勉学や研究、仕事に励む学生及び勤務員を支援することは、教育機関として当然取り組むべき事業であると考えて」と書かれてある。しかしその文言は、必ずしも実態に即したものであるとはいえない。エンゼルルームの保育支援はそれを求める当事者にとっては到底実質的とは思えないものであるからだ。というのも、エンゼルルームの開設対象日が土曜日・祝日授業日に限られていて、平日は利用できないのである。さらに、エンゼルルームは池袋キャンパスにあるのだが、新座キャンパスには託児所なるものが存在しない。

そこで私は、新座キャンパスの学生相談室なら臨時で設備を整え子どもを預かってくれるのではないかと考え、学生相談室に「学生相談室で子どもを預けてもらうことはできるか」ということと「エンゼルルームが新座に出張することはできるか」ということを相談した（2013年5月16日）。答えは学生相談室には子どもを保育する設備がないので預かることはできないということだった。そして、エンゼルルームの新座キャンパス出張に関しては池袋の学生部学生厚生課に相談するよう勧められた。

後日、相談室が教えてくれた池袋の学生部学生厚生課に電話し取材を行った（2013年5月18日）。新座キャンパスへの出張に関しては、「現状の制度、設備環境によりできない」ということだった。新座キャンパスには保育を実施する施設がなく、衛生・安全面において環境が整ってないことが主たる理由だそうだ。またエンゼルルームが平日の保育支援を行っていない理由として、「利用者が子どもを他の保育所に入所させていることを前提とし、“補完的な保育支援”を行うことを目的としている」と話してくれた。

しかし、授業の多くは平日にあり、平日の支援がないことには学校に通い続けることはできない。学生は共働き夫婦よりも保育所入所の優先順位が低いため、私のように学生という理由で子どもを預けることができないケースは多くあるのではないか。そのような人たちを想定せず考慮していないということは問題では

ないだろうか。立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科4年のクーパー麻未さん(24歳)は、大学3年生の後期に国際結婚し、息子を出産した。クーパー麻未さんは、

池袋には一応託児所あるけど、確か土曜と祝日の授業日だけだね?託児所としては毎日空いて欲しいです。学生達を活用して大学で保育所できそうだけだなあ、とったりしています。

と話してくれた(2013年11月14日メールでの情報収集より)。

また学校に託児所があることを希望しているのは職員も同様である。立教大学のボランティアセンターで勤務するIさんは、池袋には託児所があって新座にはないこの現状を周りの職員とともに不満に思っていたところだが、不満はあっても声を上げる人が誰もいないから仕方がないのだと語ってくれた(2013年7月16日新座キャンパス ボランティアセンターにて)。

さらに、2012年度版のエンゼルルーム利用案内には「立教大学では、現代社会の中で子どもを育てながら、勉学や研究、仕事に励む学生及び勤務員を支援することは、教育機関として当然取り組むべき事業であると考えて」という書かれてあったが、2013年度版には「学生および勤務員の育児と学業・就業との両立を支援し、子どもの健全な育成に寄与することを目的として」という言いまわしに変更されている。このことに関して、エンゼルルーム利用規約の制作を担当した学生部学生厚生課の職員に電話取材を行ったところ(2013年11月25日)、「制度が定着化しているということで、特に話し合いが行われたわけではなく自身の判断に基づき削除」ということであった。しかし、ホームページに記載される内容は大学の方針や理念を公式に対外的に広報するものである。「当然取り組むべき事業」と謳っていた内容が抽象的な文言に変更されたことは重要な変更にあたるのではないだろうか。また「制度が定着している」か否かはどのように判断したのだろうか。利用者の声はその判断に含まれているのだろうか。少なくとも当事者である私のもとにはそのような問い合わせはなかった。さらにこのような変更は一職員の判断ではなく利用者を含めた検証作業を経た上でなされることでより良い制度につながるのではないかと考える。

しかし、そんな立教大学に変革の動きがあった。2013年11月22日、新座キャンパスにある「しょうがい者学習支援室」にサポートスタッフへインタビューをする目的で訪れたところ、2014年4月から新座キャンパスの託児所が開設されることが決まったことを知った。新座キャンパスの学生課としょうがい者学習支援室の事務部課長である原さんとお話することが出来た。新座キャンパスに託児所をつくることになった経緯として原さんは、

これまでも学会などでそのような声はあったのですが、具体的な要望がなくてですね、森開さんも池袋に問い合わせされましたよね?最近そのような具体的な

声というのも出てきているということで、また不平等ということもあり、池袋の遠藤さんと相談して、新座と池袋が今後連携して共有していこうということになりました。

と話してくれた。体制は池袋と同じく臨時の託児所として、土日祝日に開設するという。また今のところ、山形大学のように学生サポーター制度を行う予定はなく、また早稲田大学のように一般開設する予定もないそうだ。その理由としては、業者の基準に則ることが大前提であり、保険や安全性の面から行うのは難しいということであった。しかし、いくつもの他大学がそれらの課題を解決して実施していることから、「当然取り組むべき事業」と位置づけ、その実現のための意思があるのなら解決できる問題ではないかと考える。

なお、新座キャンパスに託児所ができることに関して喜びの声を多く聞く。先ほどのボランティアセンター職員のIさんは「立教大学の男女共同参画に向けての大きな一歩」だと言い（2013年12月9日新座キャンパス ボランティアセンターにて）、コミュニティ政策学科の坂無先生は、自分の子どもを預けることになるかもしれないと語ってくれた（2013年12月9日新座キャンパス8号館にて）。しかし一方で学生中に国際結婚し出産をしたクーパー麻未さんは、

大学が職員や学生にとって子育てがよりしやすい環境になることはいいことだと思うし、私自身その知らせを聞いてとっても嬉しいです。でも、新座にも託児所ができたのはとりあえずの進歩だけれど、平日の授業日に開いてくれないとあまり意味がない…。

と語ってくれた（2013年12月9日メールにて情報収集）。

## 第4章 教育参加型の学内保育所を試みる

新座キャンパスにおいても託児所が創設されることになったのは大変喜ばしいことであるが、日本の少子化の現状と大学の社会的な役割を考えた時に、まだまだこの現状に満足してはならないと考える。そこで、立教大学において、教育参加型の学内保育所を展開することを提案する。教育参加型とは、「子が子を見る」保育形態のことで、学生が保育に参加することで自らも学ぶことが出来ることを特徴としている（読売新聞[生活保障ほっとらいん]（2002.05.17）参考）。以下、教育参加型のメリットについて具体的に示したい。

### （1）実習指導の現場

立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科には、学びに児童福祉の領域がある。また、福祉学科の教育理念のひとつである「フィールドを大切にしたい学び」についての実践の場として、教育参加型の学内保育所があることで、学生はより身近に学びを得ることができるのではないか。

さらに、保育士の資格を取得したい学生にとっても、学内保育所があることは学びの後押しとなる。立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科4年の山崎友絵さん(23歳、女)は、2年生から3年間かけて保育士の資格を取得しようと計画し、3年目の4年生で就活が忙しく保育士の取得を諦めた。彼女に立教大学に教育参加型の保育所を設置することに関して尋ねてみた(2013年10月20日メールでの情報収集による)。以下、山崎さんの意見である。

私は立教に託児所ができるの面白いと思うな。いろんな責任の問題をまず抜きにして、大学に託児所があるっていいことだと思う。保育士資格の勉強をしてる学生の立場から言うと、やっぱり実践の場ってすごく必要だなって感じる。なんかさ、テキスト見て理解できることもあるけど、どうしても感覚的にわからないところって本当にすごくあって。例えば発達心理とかだと、この時期にはこんな成長が見られます、とか書かれててもどうしても実際の子どもを見てない分ただの暗記になっちゃったりするんだよね。テキスト前にして勉強していると、本当に保育園に行ったら勉強したい！ってすごく思った！

山崎さんが保育士資格の取得を諦めたのは、就活に集中しなくてはならなかったためであるが、大学に保育の実践の場と保育系の授業がより多くあったとしたら、勉強もよりはかどったのではないかと彼女は想像する。

テキストを独学で勉強するのは、イメージがしばらく大変であることは、現在保育士の資格取得の勉強をしている私としても容易に想像ができる。私は妊娠が発覚した後、3年の春から勉強を開始し、夏の試験に9科目中7科目合格することができた。ここで注目すべきは、本来1年間以上の勉強と準備で取得できる資格を、私の場合は、取得まではいかなかったものの、数か月でほとんどの科目を合格した点である。正直なところ、全く勉強せずに臨んだ科目(「保育の心理学」「子どもの保健」「保育実習理論」)もあり、ほとんど自分の経験に基づいた勘で解いたのだが、それが合格したことには自分自身大変驚いた。ここで言えることは、実際に子どもと触れ合い、子育てをしていく中で培った経験や知識が、試験の合格に結び付いたということである。問いをわが子と重ねあわせ、「この時期はこれくらいの発達具合だったな」という風に、問題を解くことができたのである。そういった点では、「わが子がスーパーテキスト」だったのではないかと考えている。

## (2) 若者の出産・育児観の変革

“子育てに協力的な空気”は、子どもを産む決意を後押しする。先ほどのクーパー麻未さんに、子どもを産むことを決意した経緯や事情を聞いた(2013年11月8日メールでの情報収集による)。

私の場合は、やっぱり今の夫を含めて家族の支援、理解があったのが一番大き



いかなあと思います。大学生という経済的にまだ自立していない身分であっても、頼れる家族が居ること、大学を続けながら子育てもできる環境がそこにはあったので、不安が無かったわけではないけど、家族はみんな喜んでくれて、子どもはみんな育てて行くものだから心配しなくても大丈夫!と言ってくれたからかなあ。

あとは、オーストラリアの友人でやっぱりお互い学生で結婚して子どもを持った友人が居るんだけど、その友達から報告を受けたときに、「子どもを諦めたら多かれ少なれ後悔することに絶対なるけど、子どもを持ったら、状況は苦しいときがあっても、大変でも、絶対に良かったー!!って思う時が来るからね。」って言ってたのを思い出して、きっとそうだろうなあと思ったのを思い出します。

クーパー麻未さんの場合は、家族の理解と協力があつたことに加え、同じ境遇にあつた友人が身近にいて、しかもその人が出産をポジティブに捉えていたということがあり、自らの出産も決意できたという。“子育てに協力的な空気”とは、子育ての援助そのものや出産や子育てへの温かいまなざしと同時に、それらを学生自身が身近に感じることができるなにかが必要なのではないかと思う。クーパー麻未さんの場合、それはオーストラリアの友人であつたのだろう。

## 終章

「大学が少子化問題を解決する」という大それた題目で論文を書き進めてきたのであるが、この論文を書き上げるにあたって私が得た教訓は、「誰かが助けてくれるまで待っていては前に進まない」ということである。

日本の大学における子育て支援は国際的に見てもまだまだ充実しているとはいえない。しかし実際には、支援を必要としている学生は声を挙げないだけで潜在的には存在する。私自身もその一人であり、今回論文を書くに当たり「声を挙げよう」と試みたのである。そして論文を書く途中の段階で、新座キャンパスの託児所設置が決定されたのである。このことは、自身が大学に働きかけたことが少なからず影響しているのではないかと自負しているのであるが、それは「声を挙げた」ことの賜物であつたのではないかと感じている。

また、コミュニティ福祉学部長の松尾哲也先生に「学生サポーターをつかった教育参加型託児所にしてはどうか」「地域に貢献するためにも一般開設したらどうか」ということを提案したところ、「それは面白い!」と言って、とても興味深そうにメモを取ってくれた(2013年11月24日大学内食堂『こかげ』にて)。そして、新座での託児所は始まったばかりのためまずは基盤をしっかりとしてから、第一に学校に開く(学生サポーターを使う)ことをして、次に地域に開くというステップになるだろう、ということまで言ってくれた。池袋の学生厚生課でも、新座の学生課でも、これらの案は受け入れられることがなかったが、ここへきて

やっと実現への道が開けたような気がした。実際に学内保育所が学生の学びの場になっている大学や、保育所を地域開放している大学はいくつもある。設備環境や安全性の問題はあるかもしれない。しかし、そのような環境を作り出していくかどうかは大学の「やる気」次第なのではないだろうか。立教大学はまだまだ変わる。大学内で子どもと学生が共存し、ベビーカーを押す学生の光景が珍しくないものになる日が来るのを、今から楽しみにしている。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたって、ご指導頂きました立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科空閑厚樹先生に深く感謝致します。そして本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。最後に、ここまで私を育て支えてくれたお父さんとお母さん、共に三人四脚で学業と育児の両立に励んでくれた裕一くん、そして何よりこの論文を書くきっかけを作ってくれた息子の風太に感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

## 参考資料

近本聡子. 2012 コミュニティ福祉学部講義『家族政策』

2012年4月30日配布資料

厚生労働省 『平成24年度 衛生行政報告例』「母体保護 人工妊娠中絶件数、事由・都道府県別」(2013年12月8日閲覧)

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001114932>

立教大学託児所エンゼルルーム利用規約2012、2013年度 利用案内